

称号及び氏名 博士(看護学) 佐々木 綾子

学位授与の日付 平成20年3月31日

論文名 「青年期の親性を育てる乳幼児とのふれあい育児体験に関する
実証的研究—心理・生理・内分泌・脳科学的指標による評価—」

論文審査委員 主査 末原 紀美代
副査 町浦 美智子
副査 高辻 功一

論文内容の要旨

【研究目的】

青年期は、将来親になるための発達段階として、親性を獲得する重要な時期である。家庭や学校、地域社会で親性を育て、高めるための体験や学習を支援することは重要であるが、青年期後期から初婚年齢を迎える男女への働きかけの機会は少なく、システム化されていない現状にある。そのため、わが国においては少子化・核家族化などにより、育児行動の観察や体験などの、親性を獲得する機会を得ないまま親になる傾向が強く、その結果、親役割や親行動に問題が生じている。本研究は、出産・育児経験がない青年期男女に対し、親性の育成を促進させる育児体験プログラムを実施し、その効果を心理・生理・内分泌・脳科学的指標により、育児体験プログラムの体験前後で比較する。さらに、これまでは主に女性を中心に検討されてきた親性を男女差の視点から明らかにする。

【対象】

青年期の健康な未婚大学生で、出産・育児経験のない男性19名、女性19名であった。対象者は、「乳幼児とのふれあい育児体験プログラム」に参加した群（以下、育児体験群とする）と、参加しない群（以下、対照群とする）の2群に分けられた。育児体験群は男性9名、女性10名、対照群は、男性9名、女性10名であった。

【方法】

1. 質問紙調査：基礎データ〔(基本的属性・子どもとの接触体験、STAI(特性不安)プログ

ラム開始前)]、親性準備性尺度、対児感情評定尺度（プログラム開始前・初期体験後・中期体験後・終了後）。（有意水準は5%以下とした）

2. **乳幼児とのふれあい育児体験プログラムの実施**：育児体験群は、保育園の0歳児クラスで1回/1~2週間、1回2~3時間、計10回程度の乳幼児とのふれあい育児体験プログラムに参加した。
3. **心理・生理・内分泌・脳科学的評価**：ふれあい育児体験プログラム開始前・終了後に、親性を刺激するとされている課題（乳幼児の映像や泣き声など）を提示し、情動喚起刺激に対する心理学的指標〔STAI日本語版（状態不安）・対児感情評定尺度〕、生理学的指標（心拍パワースペクトルLF/HF）、内分泌学的指標（唾液アミラーゼ・コルチゾール）、脳科学的指標（fMRI：機能的磁気共鳴画像）により評価した。（有意水準は5%以下とした）
4. **自由記述による調査**：体験初期・中期・終了後に情緒面・関係性・育児技術・乳幼児の印象について半構造的質問紙による調査を行った。

【結果】

1. **心理的指標**：親性準備性尺度における「乳幼児への好意感情」得点は、育児体験群は初期より、終了後の方が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。「育児への積極性」得点の有意差は認められなかった。「泣き」場面では、「STAI」において、育児体験群の終了後の変化率が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。
2. **生理的指標**：交感神経の高まりを表すLF/HF比において、育児体験プログラム開始前・終了後とも「泣き」場面で有意な差が認められた。（ $p < 0.05$ ）。
3. **分泌学的指標**：唾液アミラーゼは育児体験群では変化が認められなかったが、対照群においては終了後に有意に増加していた（ $p < 0.05$ ）。唾液コルチゾールの変化は認められなかった。
4. **脳科学的指標**：育児体験群では、「泣き」場面において統計学的には有意ではないものの、終了後に眼窩前頭野、両側前部帯状回に変化が認められた。一方、対照群では、変化が認められなかった。育児体験群と対照群の終了後との比較では、育児体験群において、上側頭回、前頭-側頭連結部などに脳賦活の有意な差が認められた。（ $p < 0.05$ ）。
5. **自由記述内容**：育児体験プログラムに参加した初期において慣れない体験に、戸惑いや緊張、困難を感じる記述が多かった。一方、中期・後期と体験を重ねる毎に、乳幼児の特徴の理解や乳幼児への好意感情、受容、関係性の構築により、乳幼児を肯定的に受け止める記述内容が増加した。
6. **男女差**：体験群において、「乳幼児への好意感情」得点は、開始前・終了後に女性の方が男性より有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。「回避感情」得点は体験初期・中期・後期において、男性の方が女性より有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

【結論】心理・生理・脳科学的側面で、継続的なふれあい育児体験が、体験の積み重ねや

乳児との関係性の構築により親性育成に肯定的に影響していることが明らかとなった。これらは国内外の報告にみられない新知見であった。男女差においては心理学的指標に違いがみられた。

【今後の活用】

- ① 学習プログラムを修正し、教育・地域の連携を基盤に青年期男女に対する継続的なふれあい育児体験を推進する、② 1回だけの体験や継続体験の初期は対象者の反応や性差への配慮を行い、肯定的な体験になるようにサポートする、③ 親性準備性尺度を使用し、将来問題が生じる可能性のある対象者のスクリーニングシステムを構築し、早期介入する、④ 各指標における親性の高い青年期男女と低い青年期男女の比較、育児中の父親・母親との比較検討により、さらに青年期の親性の特徴を明らかにする等があげられる。

学位論文審査結果の要旨

本研究では、親性の育成を促進させる学習プログラムを出産・育児経験のない青年期男女に実施し、その効果を心理・生理・内分泌・脳科学的に明らかにした。

本研究の独自性は、学習プログラムの継続体験による効果を明らかにし、従来の心理学的評価に生理・内分泌・脳科学的評価という新たな客観的指標により評価したことである。かつ親性を男女の視点から明らかにしたことである。

その結果、心理・生理・脳科学的側面で、継続的なふれあい育児体験が、体験の積み重ねや乳児との関係性の構築により親性育成に肯定的に影響することが明らかとなり、これらは国内外の報告にみられない新知見であった。そして、男女差においては心理学的指標に違いがみられた。

本研究の結果、①本研究の学習プログラムを修正することにより、青年期男女に対する継続的なふれあい育児体験が推進できる。②親性準備性尺度を使用し、将来問題が生じる可能性のある対象者のスクリーニングシステムが構築でき、青年期男女への早期介入が可能となる。③各指標の育児中の父親・母親との比較検討により、さらに青年期の親性の特徴を明らかにする等があげられる。

本研究の独創性の高い研究であり、その成果は、社会に還元できると共に厚生労働省の健やか親子21施策への貢献を果たすことが可能となり、今後発展活用できる研究であると評価した。

よって、本研究論文は博士（看護学）を授与するに値する論文であると評価した。